

## ■ 宮川彬良 &amp; アンサンブル・ベガ公演

アンサンブル・ベガは弦楽器五人、管楽器三人とピアノの九人組。「ジャンルの境目をなくしたい」と語る宮川彬良が、巧みな話術と秀逸な編曲でクラシックとポップスを融合する異色の集団だ。宝塚が拠点の彼らが、兵庫県立芸術文化センターに出演するのは既に五回目になるらしい。ソプラノの鮫島有美子を迎えて、「森」をテーマにしたニューイヤークンサートを聴いた(1月3日)。

クラシック音楽の演奏会は静かに音に集中するのが普通だが、アンサンブル・ベガのステージは言葉と笑いに満ちている。宮川の司会進行は彼らのスタイルに不可欠だ。たっぷり時間をかけた語りは、曲をスムーズにつなぐだけで



舞台と客席とを温かく包む宮川  
④のトーク(撮影・飯島 隆)

## 言葉・笑いに満ちた演奏会

なく、舞台と客席に温かい一体感を作り出す。

鮫島有美子との共演コーナーも、歌の間に語りが入り、一種のドラマに仕立てられていた。童謡「さっちゃん」を大人のブルースに変身させる意外な編曲、男の子役の台詞で鮫島ハスキーな声質を生かす演出など、音楽的にも充実した場面だった。

後半は演奏家の見せ場が続く。例えば「森」から生まれた楽器としてヴァイオリンを紹介するコーナーでは、辻井淳がタルティーニの難曲「悪魔のトリル」を披露した。

しかし、コーナーの最後を「森」にちなんだ洒落でまとめて、奏者に負けない喝采を取りに行くのが宮川流だ。真剣な演奏の後だからこそ笑いの幅が広がる。音楽と言葉、真面目と笑いが常にせめぎあうステージなのだ。

良い演奏を聴くと、人は能弁になり、会話が弾む。批評もまた、そうした冗舌の延長なのかもしれない。宮川を見習い、言葉を磨かねば。そんなことまで思ってしまう完成されたステージだった。